



守りのサイエンスを伸ばす

2023年7月25日(火), 井上尚弥選手がWBC・WBO世界スーパーバンタム級王者スティーブン・フルトン(Steve Fulton)を8回TKOで下し, 4階級制覇の偉業を成し遂げた。誰も文句つけようがない華々しい勝利に日本中が沸き上がった。

「攻撃は最大の防御」という言葉がある。世界王者になった日本人ボクサーの多くはハードパンチャー(攻撃型)であり, 井上選手も例外ではなく, 彼の戦績(25戦25勝22KO)が攻撃力の高さを如実に証明している。しかし関係者によると, 彼の本当の強さは, 類まれな防御力にあるという。力で相手をねじ伏せるのではなく, 敵選手との間合いを見極めながら, 冷静に一撃必殺のパンチを繰り返す。実際, 試合後, 彼はほとんどダメージを受けていない。

研究の世界も「攻撃」と「守備」というゲーム感覚で捉えると興味深い。例えば, 幼いころからの好奇心や趣味が高じてアカデミアの道を選んだ研究者は, 典型的な攻撃型であることが多い。時間と体力が有り余っている若い間に猪突猛進で研究に没頭し, 輝かしい成果を出す人も多い。一方で, 私のように, 国家資格や企業への就職など, 色んな可能性を検討しながら最終的に研究の道を選ぶ研究者もいる。決して受け身というわけではないが, 自身や家族のQOLを保障しながら研究を続ける守備型である。実験に関していうと, 新しい発見に対して, その生物学的イ

ンパクトが如何に大きいかに支持する知見を積み上げる作業を攻撃的とするなら, 裏付け(再現性)をとる作業は守備的といえる。長い研究人生で考えた場合, トップジャーナルに掲載される成果論文を出す研究を攻撃と捉えると, 自身の新しい概念や技術の普遍性・共通性を論文に出し続ける研究は守備といえる。情報手段が発達してなかった一昔前は, 「セレンディピティ」が宝探しのような感覚であり, 多少ハードな実験も楽しく挑戦(攻撃)できていた。ところが最近では, IT技術が爆発的に進歩し, 多くの情報が簡単に入手できるようになり, 自分の研究と関連する学術論文やビッグデータもねずみ講的に増加してきている。30年研究職を続けている私でも, 日々更新される情報(=攻撃)に対して整理(=守備)が追いつかなくなっている。学生を見ていると, 大学に入るために必死で勉強してきたのに, 入学後もさらに多くの知識・情報を習得しなければならず, 研究室に配属される時点ですでに疲弊している様子すらうかがえる。自信喪失してしまい, メンタルケアが必要な学生すら出てきている。必死で単位を取得して卒業しても, 将来が保証されるわけではなく, 会社の事情により転職する先輩が増えている現状を知り, 日本社会の将来に希望を感じない学生も少なからず存在する。今の不安定な社会状況において, ハイリスクローリターンの研究職を選ぶ学生が減るのは自然な流れだと言わざるを得ない。

最近, 『置かれた場所で咲きなさい』(渡辺和子著, 幻冬社)という本を読み, インスパイアされた。実験室では, 市販の簡便なキットや試薬が当然のように使われており, 意欲的な学生でさえ, その基本原理や「ポジコン・ネガコン」の置き方を理解していなかった。今の若い学生に必要なのは, 地に足をつけた基礎的な実験・経験を積み重ねる時間なのかもしれない。

(MOTO)